

を異にする。

ともかくも、此如き根本史料に容易に接する事が出来た事の吾人の喜悅は言ふを要しないであらうし、紙背の彼岸庄文書また莊園研究の重要な史料たり得る。

育徳財團當事者の努力と好意に多大の敬意を表する。(中村)

○先聖先賢聖道一報養

——國民精神文化文獻六——

本書は彼の元寇の國難の秋に當り、敵國降伏の事を神佛に祈願して愛國の熱情を披瀝した、宏覺禪師東叡壽安の著書であつて、卷子本上下二巻を一冊にまとめ、新しく國民精神文化研究所より國民精神文化文獻第六として世に出されたもの、原本は洛北正傳寺の所蔵にかゝり、現在恩賜京都博物館に寄託せられてゐるのである。

本書の内容は、王法、國家、道德等に關する先聖先賢を問答體に於て説いた一種の教訓書ともいふべきもので、文永十年壽安が彼の弟子圓瓊に與へたものであるが、實に愛國僧壽安の思想を體系的に窺ひ得る唯一の著書とも云ふべく、且對外關係の緊迫によつて、著しく國家意識の高揚せる、當時の國民思想の研究上、缺くべからざる貴重な資料であらう。(東京・國民精神文化研究所發行、菊判仕立和裝、四一頁、定價壹圓貳拾錢)

○近世政治史

吉村 宮 男 著

紹 介

——新日本史叢書第一回配本——

凡そ一國の社會的不安が國民の意識に登り國家的危期が叫ばれる様になるとあらゆる學問——特に解釋の學問としての文化科學の領域に於ては、明快にして鋭敏なるものが要求せられて、學問は速に立場の分裂を始める。我國に於ても近年非常時日本の聲が放たれて以來、國民の歴史は様々の立場に於て批判せられ、歴史に於ける多くの學派は、それらに、自己の黨派の目的意識を以つて次の時代への強力なる指導性を誇示せんとしてゐる。國史の學問は正に情熱の俘となり終らんとしてゐるのである。かかる學問的危期に當つて真に我々の思向すべき途は、無限に純粹なる立場への欲求に於て書かれたる力強い歴史、エネルギーを有する歴史でなければならぬであらう。まことに歴史學は私的な感情と信念を越えて理性的なる立場に立つ事により、他面に於てはまた深き學問的理解によつて速に詩と文學から自己を分離せしむべきである。

此の秋に當つて西岡虔之助氏を中心とする「新日本史叢書」二十五巻が「アカデミーの教養を充分に自己のものとして、その上に新たな領域を開拓しやうとする」所の「東京帝國大學文學部出身の若き良心的史學者」達によつて世に問はれんとしてゐる事は眞に興味多き事柄である。その企圖する所は「倭敵なる史實の認識に基づく學問的純潔さを、とらはれる所なき批判によつてなる清新にして強靱なる敘述」の中に「日本歴史の新しい體系」を展開せしめんとするものであつて、我々は先づ本叢書の「翹望」が學問的

エネルギーに生きんとする點に多大の好意と尊敬の念を贈るべきであらう。

本叢書は西岡氏の「新日本史總説」以下、大體時代毎に經濟・政治・思想・文化と特殊専門の歴史を執筆者各自が擔當せるもの。その第一回配本「近世政治史」をみるに近世政治の特質、徳川幕府政治の成立・幕府官僚の構成・所謂文治政治の展開・幕府政治の停頓・幕政の崩壞過程・結論と大體概説的な構成の下に諸章を立て、近世封建社會に於ける政治形態の特質を以て、封建社會存立の物質的基礎たる農民謀求の合理的遂行、及び斯かる封建社會を根柢より動搖せしめる所の近世的商品經濟に對する爲政者の政策にありとし、封建制再編成者としての信長・秀吉より家康の登場及び鎖國の實現によつて完成せられた近世封建社會も將軍家綱より實經て徐々に崩壞の過程に入り、松平定信等の補強工策にも拘らず天保改革の失敗によつて「近世的政治支配の基礎は全面的に分解」せんとする機運に向つた、とする。著者吉村氏の抱く社會發展の理論はまことに明快、社會の下部構造との聯關に於て、政治形態の推移發展の必然性を示さんとする主張は、全敘述を通じて最も著しく看取される所である。著者吉村氏は最近東大國史科出身の新鋭と聞く。此の大著を手際よくまとめられた手腕は實に偉とすべきであるが、全編を通じて聊か公式主義的な安易さが存在しはしないか。殊に後半本論を天保改革に絶ち、以後幕政の没落・版籍奉還に至る過程に關して僅かに十頁を費したに過ぎない點は、一面に於て眞の意味に於ける封建社會の潰滅が政治的にも亦祿制

の廢棄にある事を思ふ時、全敘述の體制の上に少しく不安を感じざるを得ない。

けれども本書の期す所が態度の眞面目さにあり、若き學徒の清新なる主張に在りとすれば、斯く完結せられたる概説的政治史はそれ自身としても尙此の道の入門者にとつて好參考書たるを失はないであらう。唯本叢書は二十數氏の共同勞作によつて「新體系の樹立を翹望」するもの、我々は執筆者各位が眞に統制ある組織の下に、舊文化史に於ける百味筆筒の寄合所帶の無力さを尅服して、所期の目的を實現せられん事を冀望するものである。(東京・内外書齋發行、四六版、三〇二頁、每冊壹圓五拾錢(以上内藤)

○滋賀縣八幡町史綱要

福尾 猛市 郎 著

近江商人の本場として、我國近世の經濟史上特異の地位を占める滋賀縣八幡町にあつては、數年來町史の編纂を企圖し、福尾學士に囑して史料の蒐集整理に力を盡しつゝあつたが、昨今漸くその編纂の緒につかんとするに當り、まづその概要を取纏めて町史綱要の名を以て公刊せらるゝことゝなつた。この書は學士が同町實業學校生徒の爲に講述せられたところの町史の議案を骨子とせるものであつて、その敘述は極めて平明に、淡々として太古より明治初年に至るこの地變遷の跡を述べてある。その讀者として豫想せられてゐるところは當の町民にあるのであらうが、我々一般人にとつても極めて興味深く、菊判一〇四頁の分量も通讀には誠に頃合ひである。近時諸方に於て編纂される地方誌が往々にして